

二〇一八年六月の「森三郎の作品を読む会」では『森三郎童話選集かささぎ物語』（1995年、刈谷市教育委員会）所収の「めぐりあい」（『赤い鳥』昭和9年8月号初出）、「赤鬼青鬼」（『赤い鳥』昭和8年1月号初出）を読みました。

「めぐりあい」については、「かささぎ通信」第47号で、この話が唐来三和の黄表紙『再会親子銭独楽（めぐりあふ・おやこのせにごま）』を元にして作られた作品であると述べました。今回の「森三郎の作品を読む会」では、『赤い鳥』初出作品を底本とした『森三郎童話選集かささぎ物語』の中の「めぐりあい」と、単行本『かささぎ物語』（昭和17年、帝国教育会出版部）所収の「めぐりあひ」との読み比べを試みました。

まず、兄弟の銭が『赤い鳥』では四文銭と二文銭になっていたのが、「帝国教育会」版では四文銭と、一文銭という実際に流通していたお金に変わっていました。『赤い鳥』掲載の時の誤りを正したのでしょうか。他にもいくつか表現の違いを比較してみます。（「刈谷市教育委員会」＝㊦、「帝国教育会」＝㊧）

①㊦「おあしを一つちようだい。べろのかわりにつけるの。」
㊧「ペロの代りにするんだからおあしをおくんな。」

「帝国教育会」版では両替屋の女の子の言葉だけでなく、長屋のおかみさんたちの言葉も、生き生きした方言です。②㊦「さあ、買ったたり買ったたり。これでみがけば歯の根もしまる。大袋、小袋徳用袋」

㊧「一月、二月、三月さくら、さくらの色の桜香散、みがけばお歯が米の色。」

「帝国教育会」版は歯みがき売りの威勢のよい姿を想像させる口上です。他にも頼まれごとをした時、「おっと、のみこみ山だ。」というような言葉遊びが日常会話として使われています。

全体に昭和17年の帝国教育会版の「めぐりあひ」は、会話が流暢で掛け合いの生き生きとしたリズム感のある作品になっている、というのが集まった会員の感想でした。

森三郎は昭和18年に書き下ろしの短編集『うぐいすの謠』（拓南社）を出版しています。その中に「ものぐさ物語」という作品があり、「あとがき」で作者自身が次のように書いています。

「ものぐさ物語」は昔話の物臭太郎の傍系の作です。登場人物のすべてをものぐさで行った趣向は、唐来三和の黄表紙「物臭太郎月」に学んだのですが、三和とは全然別なものにしてをります。

「ものぐさ物語」は物臭太郎の民話とは違い、昔話の「どっこいしよ話」を織り込んだ話です。『赤い鳥』を巢立ってから書き直した「めぐりあひ」や、「ものぐさ物語」などの作品を読むと、森三郎が黄表紙に関心を持っていて、滑稽の趣の作品を書こうとしているのではないかと思われます。しかし、『赤い鳥』時代に無署名で書いた「昔の笑ひ話」の小話には、既に三郎の「笑い」の文学の端緒が見えているような気がします。「作品を読む会」の今後の課題として読んでいきたい分野です。

「赤鬼青鬼」は、夕暮れになって主人から重陽の節句の菊酒と出世魚のスズキを互いに持って行くように言われた、臆病な下男同志のやり取りを描いた話です。三郎は、二人が互いに鬼の面をかぶって相手をおどす様子を面白く、狂言風に仕立てています。鬼の面をかぶるといふ発想は、狂言「柑子俵」がヒントになっているかもしれません。この狂言は、後に森銑三も『日本人の笑』の中で紹介していますが、売り物の俵の中の柑子を全部食べてしまった子どもが機転を利かせ、鬼の面をかぶって俵に入り、大の男をびっくりさせる話です。三郎の「赤鬼青鬼」では、赤鬼の面をかぶった男におびえて逃げ帰った下男が、こんどは青鬼の面をかぶって相手をおどします。それぞれが主人に言い訳をするやりとりも見事で、秀逸な作品だと会員からも声が上がりました。

八月の「森三郎作品を読む会」は休会です。

今回の「森三郎の作品を読む会」（内容）「かささぎ物語」「竹馬与市」

平成30年9月14日（金）午後1時半～3時半